

香港日本人学校中学部における現地校との交流活動の取り組み

前香港日本人学校中学部 教諭

埼玉県所沢市立若狭小学校 教諭 池内 真利子

キーワード：交流活動，現地校との交流，校外活動，総合的な学習の時間

1. はじめに

香港日本人学校は、日本人学校の中でも規模が大きく、小学校2校、中学校1校から成っており、校舎もそれぞれ独立している。校内にいと、日本の学校にいるような感覚に陥るほど、学校の実態も生徒の実態も日本国内の学校と似ている。だが、一歩外に出ると、周囲を現地校やインターナショナルスクールに囲まれており、部活動など生徒同士の交流もよく行われている。

そんな中、香港日本人学校中学部では総合的な学習の時間の中で積極的に現地の学校と交流を進めている。今回は、その様子をご紹介します。

2. 香港在住の生徒の実態

(1) 語学力

香港で日常的に話されているのは広東語だが、広東語を流暢に操れる生徒は1割もいない。もともとイギリス統治下にあった香港は英語も日常的に使われているため、買い物やちょっとした会話は英語で済んでしまう。それどころか、香港進出している日本企業が多く、日本語も生活に溢れている。むしろ、家庭、学校生活、塾など子ども達の生活言語はすべて日本語である。そのため、英語を第二言語として習得できている生徒は少ないのが現状だ。いくら海外に住んでいるとはいえ、やはり英語の習得は課題となっている。

(2) 現地の方々との交流

日本人学校の生徒が現地の方々と接する機会という点、習い事が主となる。日本人を対象とした習い事は多数存在するが、子ども向けとなるとそう多くない。多くの子どもたちが、現地の子供達とともに活動する。野球やサッカー、バスケットボールといったスポーツ少年団は日本人だけのチームもあるが、対戦相手は現地の子供達のチームであることが多い上、より高いレベルを求めていくと自然と日本人のみの活動から離れざるを得ない。それはピアノや絵画といった文化的な習い事についても同じことが言える。その際、子どもたち同士のコミュニケーションは英語で行われる。

また、当たり前だが街に出れば、自分が外国人。何をするにもまずは言語が必要となる。ファストフード店で注文するにも、漫画や雑誌を買うのも、相手はすべて現地の人だ。きちんとした場が与えられた交流ではないが、小さな交流は毎日行われているのである。

(3) 保護者の方々の思い

香港日本人学校では保護者の方々向けに、学校の教育活動についてのアンケートを行っている。その中で保護者の方々の期待が高いのが、「現地の学生との交流活動を増やしてほしい」「総合学習の充実を図ってほしい」ということだ。せっかく香港にいるのだから、この地の文化に少しでも多く触れてほしい——そういう思いが読み取れる。

海外在住の子どもたちが置かれている環境は、とても貴重である。日本では見られないことが身の回りに溢れているのだ。様々な国の生の文化に積極的に触れてほしいというのは、海外在住の保護者の思いとしては当然のことであろう。総合学習の中で学ぶ国際理解は、日本人学校にとっては環境を生かした素晴らしい題材と言えるのではないだろうか。

3. 現地の文化に触れる交流活動

(1) 中学1年での取り組み

① 大学生と日本語での交流

それでは、実際にどのような総合学習を行ってきたのか、学年ごとに紹介しよう。

まず、1年生は「香港を知る」ということを大きなテーマに、徹底的に香港について調べていく。その中で、主に現地の大学生との交流し、香港についていろいろと教えてもらうのだ。

最初の活動は、香港城市大学の学生とともに元朗（ユンロン）という街を巡り、香港の歴史に触れる。元朗はもともと客家によって作られた町で、客家の文化を示す建物が多く残っている。また科挙の試験勉強のための建物等もあり、さまざまな歴史を学ぶことができる。この活動では、中学生は5～6人で一班を作り、そこに大学生1人にガイド役として付いてもらい、行動する。この香港城市大学の学生は日本語専攻の方で、行く先々の建物の説明を日本語でしてくれる。子どもたちは自分が決めたテーマに従って香港について学んでいく中で分からないことを大学生に聞き、学びを深めていくのだ。



大学生に香港の歴史について
教えてもらう

② 大学生と英語での交流

次に行うのは、中文大学の学生との交流活動である。ここでは初めに、大学生が小グループとなり、グループごとに体育館でブースを作り、香港の様々な事柄について日本語でプレゼンテーションを行う。中学生はそのブースを周り、大学生のプレゼンテーションを聴くのである。その後、今度は中学生と大学生で小グループとなり、中学生が日本についての簡単な紹介を行う。それぞれの紹介は、すべて英語で行われる。こちらも日本語を学んでいる大学生相手ではあるが、こちらの学生は発表はできるものの会話はまだ不十分なところがある。そのため、英語中心の活動は中学生にとってはかなり難しい挑戦である。事前に国語の授業でプレゼンテーションの流れを学んだり、英会話の授業で紹介にふさわしい表現の学習をしたり、英語の授業で自分の原稿の英作文をしたりと、他教科と連携しながら成功に向け取り組みを続けていった。

③ マカオの中学生との英語での交流

中学1年の締めくくりの活動は、宿泊学習で行われる現地の中学生との交流である。

ここではまず、これまで調べてきた自分のテーマに関する日本の紹介を行う。前述の大学生との交流では、少なからず相手は日本に興味を持っていることが前提であったが、今回はそうとは限らない。そんな相手に対し、自分が伝えたい内容をどう伝えるか考え、工夫しながら紹介をする。実物を持っていき、身振り手振りを交えながら一生懸命に伝える姿が印象的であった。その後、日本の遊びで一緒に遊び、交流を深める時間もあった。そこではかしこまった空気も和らぎ、楽しそうにコミュニケーションを取る姿が見られた。

(2) 中学2年での取り組み

① 修学旅行で言葉を越えた交流

2年生では、「日本を知る」という大きなテーマのもと、各自で1年間通して調べる日本文化についてのテーマを決め、様々な活動を通して、外から日本を見つめなおしていく。その中で子ども達にとって大きな学習の場となるのが、マレーシア修学旅行である。この修学旅行でも、現地の方々との交流活動を設け、お互いに話をすることで日本独自の特徴を洗い出していく。

まずは、B&Sプログラムだ。これは、現地の大学生が各班に1人ずつ付き、中学生が立てたプランに従って、クアラルンプール市内を見学するというプログラムである。ここでの会話ツールはもちろん英語だ。しかし、1学年時に英語での活動を体験しているため、子どもたちはある程度自信を持って取り組むことができている。

次の活動は、ホームビジットだ。これは子どもたちが現地の家庭に半日ほどお世話になるプログラムである。

ここでは英語が通じない家庭もあり、子どもたちはしおりに書かれたマレー語と身振り手振りで交流をすることもあった。子どもたちは実際の人々の生活に触れながら、自分のテーマに関する情報を集めていく。この生の体験はやはり子ども達にとっては興味深く、一生の宝物となる。言葉を越えた交流が行われる瞬間だ。

② 現地の中学生にソーラン節を教える

日本文化についてテーマごとに情報をまとめた後、子ども達はその文化を伝える側となる。毎年行われている



言葉ではなく気持ちで伝えることを学ぶ

現地校との交流で、同じ中学生に日本のソーラン節を教え、一緒に踊るのだ。初めに日本人学校の紹介を行う。ここでは、これまでの交流活動で気づいた日本人学校ならではの活動を取り上げ、紹介する。その後、ソーラン節の紹介をし、教える時間の始まりだ。ここでもグループごとに身振り手振りに英語を交え、全身全霊で伝えていく。相手が分からない時には伝え方を変え、相手ができたときは全力で喜ぶ—そんな姿が体育館中に溢れていた。終わった後、「…疲れたけど楽しかった。」という言葉が交流活動の意味を物語っているのではないだろうか。

(3) 中学3年での取り組み

3年生では「自己を知る」というテーマのもと、香港大学の学生との交流活動を行う。キャリア教育の一環で、香港大学の学生にこれまでの生き方について話を聞き、自分の進路選択に役立てていくのである。ここでは言葉はただのツールとなり、文化は違っても身近な先輩の話を真剣に聞いている。日本と香港の2つの文化の中に住む自分と向き合い、自分の生き方を考えていくのだ。これが交流活動の締めくくりとなる。

4. 様々な交流活動の成果と課題

香港日本人学校で取り組んだ様々な交流活動を通して、様々な学習が子どもの中に積み上げられている。そこで得られた成果と課題を私なりに以下のようにまとめた。

- まったく違う文化に生きる人々に触れることで、それまで自分になかった視点を獲得することができる。
- 「違う」ことが当たり前で始まる交流活動を通して、誰であっても「自分と違う」ことは特別ではなく当たり前のこととして捉えられるようになる。
- 自分が話さないと進まない（学べない）場面が多く、英語の必要性を否が応でも感じ、英語学習への意欲が高まる。
- 英語に対する抵抗感が減り、言語はただのツールであることをだんだんと感じ始めていたようである。
- ▲中学1年生時は特に、交流活動に必要な英語力が、普段の言語学習内容に比べると明らかに難易度が高く、英会話講師等の協力がないと進められない。
- ▲グループでの交流となると、話せる子に任せ気味になってしまうため、学べる内容に偏りが出てしまう。

5. おわりに

私自身、日本人学校に赴任をして、それまで当たり前だと思っていた日本の文化が、実は日本独自のもので特徴的なのだと知ることが多くあった。そして、それを知ることで自分が日本人であることにいつしか誇りを持つようになり、だからこそ自信を持って生きていけるような生き方をしなくては、と思うようになった。

しかし、それらはどれも自分から違いに触れる場を求めていかないと気づくことができないことばかりである。子ども達が、それを自ら求めていくことはなかなか難しい。子ども達に学んでほしいと思うことがあるのなら、それは学校や保護者がそのような場を積極的に設けていくことが必要である。そして、それは「海外」だからできることではなく、日本にいてもできるはずだ。子ども達の学びは、様々な人や物と交流することで深まっていく—そのことを忘れずに、これからも多くの活動に携わっていききたい。